

京町家通信

KYOMACHIYA PRESS
vol.120

京町家通信 第120号 2018年9月1日発行
特定非営利活動法人 京町家再生研究会
一般社団法人 京町家作事組
京町家友の会
京町家情報センター
ホームページ <http://www.kyomachiya.net/>

巻頭言 ◎ 京町家親子体験教室

かねてからの懸案事項であった、こどもの町家体験がようやく実現した。こどもたちと一緒に町家について体験出来るような機会がないものだろうかと折りに触れ、幹事会で話をしていたことが7月の祇園祭からスタートした。真夏から真冬まで、7回の体験を小学生と親御さんに体験してもらう企画である。

どのようなことにこどもたちの興味があるのだろうかと、てさぐりながら以下のプログラムを作つてみた。

7月 京町家の話 祇園祭のしつらえと普段と違う町の様子を見る
8月 お掃除体験 町家の掃除（雑巾がけ、土間を洗うなど）
9月 ベンガラ塗り体験 京町家の外観を学びながら、ベンガラ塗りを体験
10月 土壁塗り体験 京町家の構造を学びながら土壁塗りに挑戦
11月 炭起こし体験 火鉢やてあぶりで炭のあたたかさを感じる
12月 障子のはりかえ体験 建具の種類を見ることと障子を貼ることを体験
1月 掛け軸を扱う 町家のお座敷の大切なしつらえを体験する。
現在第二回目のお掃除体験がすんだところ。

初日、7月15日は祇園祭の真っ最中。お祭のためのお花、屏風、段通（だんつう・藍染めの木綿の敷物）などの説明をしながら、お座敷でお客様としての初体験をしてもらった。こちらが一方的に話を進めたせいか、緊張のためか少し言葉少なめで体験会をスタート、今後の子どもたちの反応に期待大である。

記録的な猛暑であった8月5日、こどもたちと網代、藤筵の雑巾がけをした。暑い暑い日ざかり、動くのもおっくうになるほどの高温のさなか、まずはタオルが雑巾になる過程の説明から始める。手ぬぐいは古くなったら雑巾に縫うこと、布類を最後まで使い切ること、絹の着物も着物から長襦袢、お布団、ハタキへと次々姿を変えて最後まで使われていたこと等、「しまつ」「もったいない」という考え方についてのお話をした。暑い日だったので、水をさわることが気持ちよく、終わってから感想を子どもたちに聞くと「楽しかった！」という反応。掃除が楽しいという、これが毎日だったら、真冬だったらどうかなあと思いながらも、うれしい感想でよかったです。

編 集 特定非営利活動法人京町家再生研究会幹事会

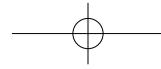
たった2回の体験であるが、こどもたちの素直な反応に力をもらっている。町家は住みにくく、維持が大変、普段はどちらかというと否定的な話がまず先にくるのだが、こどもたちは「きれい」「たのしい」「涼しい」などなど、こちらの心配をよそにうれしい反応を示してくれる。

次は町家の壁や格子を触る。普段は見えていても「触ってはいけません！」と言われることが多いが、この体験会ではいろんな物を触ったり扱ったりしてもらう。どのように壁が出来上がっていくのか、格子の色はどんなふうにつけるのか、きっと初めての体験になるだろう。土壁、べんがら体験では、手間も時間もかかる作業が町家にはたくさんあることのとつかりを感じてもらえたうれしいのだが、さてどのような感想がきこえてくるのか、楽しみにしている。

私たちがこの体験会で目的としていることは、本当の物を触ってもらう、感じてもらうということ、言い換えれば、きれいなものを見てもらいたいということになる。京都の住まい方の感覚は言葉ではなかなか表現ができない。それを家中にはいること、物を扱うこと、触ることで感じてもらいたい。そこから京都の住まい方の基本を体で覚えてほしいと思っている。一朝一夕では出来ないと思われるかもしれないが、子どもたちは鋭い感性をもっている。だから最初に見るもの、触れるものは良いもの、本当のものでないとその感性がぶつてしまふことになるだろう。こちらも緊張することではあるが、その最初のきっかけとなる体験を大切に進めたいと思っている。

京都市の友好姉妹都市ボストンにはチルドレンミュージアムがあり、その建物の中には京都から運ばれた町家が建っている。ボストンのこどもたちはその町家で日本の住まい、住まい方を学ぶ機会がある。もちろん入場料を払えば誰でも入れる。京都にもこのような町家があれば、たくさんのかどもたちが京都の暮らしをもっと身近に感じてくれるようになるのではと思っている。

＜小島富佐江（京町家再生研究会）＞



論考 ◎上質宿泊施設誘致制度－急増する民泊と町家

世界中の観光都市で観光公害が拡大している。理由は簡単、LCCと中国人客増加で過去10年間に海外旅客総数が5割も増えたからである。パリ、バルセロナ、ヴェネツィアと並んで京都でも深刻化したのは皆さんご存知のとおりである。その都市の人口と観光客数との比をみると、京都よりバルセロナははるかに深刻だという人もいる。しかし、西欧と比べ中国に近い分むしろ被害は大きいという人もいる。もう一つの側面から見ると、入洛観光客数は年々減っているが、それは日本人の減少分を滞在日数が長い外国人が大幅に増えたことで補っている。しかも、総宿泊者数が急増、だから雨後の竹の子のようにホテルや簡易宿泊所が増えた。それも外から建てに来る。でも、ホテル不足は解消されないという。

そこで、京都市はこれまでホテルが建てられなかった用途地域に例外的に建築を認める新制度を昨年度から2021年度まで続ける。説明に苦しむから「地域の生活と調和した質の高い宿泊施設の誘致」と京都市は言う。建てられない地域とは、工業地域、住居専用地域、そして市街化調整区域である。一定条件を満たした施設は、京都市が窓口となって必要な手続きをワンストップで支援するという。宿泊施設だけに限って、見境なく特例を認めようというの京都市が初めてだという。

工業地域にホテルや会議場、テーマパークや商業施設を建てたのは1980年代、産業構造転換で遊休地化した臨海工業地帯をウォーターフロントと呼んで開発した。内陸都市でも、インターチェンジや鉄道操車場跡地の2000年代の再開発でよく見られた。京都市でいう市街化調整区域、つまり市街地周辺の農地には、農家が経営する農家民宿は世界中で認められていた。京都市もそれに倣い、地元農産物を利用したレストラン付のオーベルジュを挙げ、宿泊者数よりもレストラン席数が多く、客室は3室以上を認めるという。他にも、古民家の再生したホテルで、スイートルームを備え、最低客室面積が40m²以上の最高級ホテルの誘致を想定しているという。これ以上の入込客増加を望まない京都では、エコノミークラス室数を減らし、ファストクラス優先、豪華ホテルと“街中の小宿”を増やしたいのである。

この“街中の小宿”が住居専用地域での“上質宿泊施設”である。この住居専用地域には、私たちの京町家はあまりない。伏見に続く道沿いに住居系用途地域があるものの、京町家は都心3区と伏見区で主に商業地域、近隣商業地域にある。住居専用地域とは下鴨、嵯峨、桂、山科等である。京都市は地域を活性化する宿泊施設を誘致するとはいうが、活性化があまり望まれない地域もある。

昨年の民泊の議論（住宅宿泊事業法）でも問題になったのは、急増する不慣れな観光客と事業者の迷惑行為にあった。中国人の多くが、生れて初めて海外旅行で初めてインターネットを通じて、初めて民宿に泊まる。そこに居住者不在型の民泊、賃貸マンションでより高い利回りを得ようとする業者が不慣れな民泊を始める。上手くいくはずがない。そのトラブル被害は、関係もなく無垢な周辺住民に及び、それを止む方途がない。住民が悪徳不動産業者による“民泊公

害”に晒され、町並みが壊され、京都の風情が損なわれる。

この背景には、人口減少で住宅需要が先細りの中、長年の成長モデルから転換できない業者が賃貸マンションの供給過剰を起こしている問題がある。借入金が大きく、次々と建てては分譲し続けないと、資金繰りがつかないのである。経営破たんしたスマートデイズ社の女性向けシェアハウス「かぼちゃの馬車」事件では、スルガ銀行が悪意に満ちた審査偽装でこの悪事に加担し、詐欺紛いの勧誘で多くの善良な被害者を苦しめているといわれる。現在は、サブリースで家賃減額で家主を破産に追い込むと言われるレオパレス21が注目を集めている。

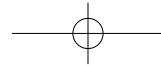
この2社ほどではないだろうが、京都なら余った部屋を民泊で運用という安易な発想で参入する業者が多い。これまでほぼ十年ごとに起きたマンションによるまち壊しの再来になるところだった。民泊ブームを悪用する輩を阻止するために民泊条例は役立っている。そこに、新たな抜け穴をというのがこの“上質宿泊施設”制度になるかもしれない。

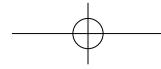
街中で民泊によるまち壊しを止めるなら、郊外を狙えともいうのだろうか。住居専用地域なら賃貸マンションは建てやすい。高齢者の独り住まいや空き家が多く、土地活用した地主も多い。民泊で高利回りをと謳い、サブリースで最初の5年家賃を保障し、多額の借金で相続税対策をと唆し、次々と安普請の手抜き工事をしたい業者の思惑が透けて見える。直接の被害者は善良で高齢な京都市民になるだろう。そして、世界文化遺産周辺の景観が壊され、伝統文化と歴史風致が損なわれるだろう。

今までそうだったように、問題の本質を見定める必要がある。観光客が増えるのは止めようがない。京都だけで増えているのではない。日本人が減り、日本人観光客が減る時代、皮肉なことに世界中で観光客が増えている。1990年に4億人だった国際旅客数が、2000年に6億を超え、2013年に10億、2022年に14億、2030年には18億人になると予測される。閑空の混み具合を見れば分る。我々だって豊かになれば海外旅行に出かけた。

要は、この影響をどう受け止めるかというまちづくりの考え方、技、ルールづくりにある。町家や町並みを守るために人々を貧しいままに置くことはできない。核家族化や独居を禁止することもできない。風呂のない下宿で若者に我慢を強いることもない。だから住宅は常に更新し、店もオフィスも、ホテルも増減を繰り返す。ただ、その折々に町家と町並みを守ろうという考え方を再確認し、技を駆使し、ルールを改めるのである。油断すると、隙間を縫うように荒稼ぎに走る悪徳業者がいる。火事場泥棒である。この動きに対抗することこそ、本当に良質な宿泊施設を誘導する仕組みづくりになる。羊の皮を被った狼に騙されないように、的確な対応策がいる。住居系地域の宿泊施設を検討する場合、都心部での民泊同様に、きめ細かい安全対策は元より、周辺住民との協議、ルールづくり等を義務付けること、一段と厳しい景観規制等を、設置者に求めることになるだろう。

＜宗田好史（京町家再生研究会）＞





報告◎ 公開シンポジウム2018 京町家新条例の適切な運用を考える —町家をこれ以上壊さないために（続）

前号ではパネラーの骨子を紹介いたしましたが、今回は後半、パネルディスカッションの論点を紹介いたします。

◇地域と地区指定

京町家は地域で守っていけるようにする。

地域ごとに判断できる仕組みをしっかりと作る行く必要がある。行政としてある範囲を定める、地域で決める領域を定める、という制御の方法にして、地域に情報を送って、地域で議論する。地域のまちづくり支援をもっとやっていけば、町家の保全や継承をうまくスムーズにやっていくことができる。

住んでいる人の力を高めて行く施策を行政として検討してほしい。教育的なアプローチも事業の中で取り込んでいくように。

◇所有者を支える

京都市の借り上げも考えたい。「知らない人に貸したくない」という所有者の思いが結構大きい。オーナーに対して間に入っている種の信用力を得て、次の借り手を見出していく、その間に改修できるようなシステムをつくりたい。

この25年間に家族の力が弱まった。4割が一人暮らしで、自分の力も高齢化で弱まっている。自分の家のことを家族で考えられない状況で、コミュニティの弱体にもつながっている。介護も含めて家族を支えることを考えないといけない。

◇京都の総力

町家には一つの社会がつまっている。教育や医療も関係している。京都市がこれらの複雑な問題を解くために都市計画局だけではなく、横に並んだ京都市のメンバーが、さまざまな問題にも対処できるように、相談者を包み込んでいくような相談の仕方を望んでいる。

多様なスタッフが今回の条例をうまく進めるために必要となる。「京都市が縦割り」と揶揄されるのではなく、都市計画局がさまざまな関係部署に声をかけて、京都の総力戦になればよい。

◇京都離れ

京都で買おうと思っても「高くてもう無理」という人もおり、町家をほしいお客様が大津の物件でいいというような状況になってきた。ますます京都離れが起きるのではないか。

◇市場のコントロール

都市計画の道具として使える規制策、誘導策として、技術的制御でまちをよくしていくことをこれまで一生懸命考えてきたが、これは一つの方法に過ぎない。経済的制御をうまく行うことも重要である。まず、市場メカニズムがちゃんと機能していくような環境整備が必要となる。現在の不動産市場の問題は、土地市場だけで床市場が十分整っていない

こと。壊して住宅になるならば壊さなくても良いという考えを共有しなければならない。十分活用できる市場が本来はあるのに、議論できていない。さらに、まちづくりの視点から税制などの有効な活用方策が検討されるべきである。

文化の継承のためには居住機能の維持が必要である。居住がゼロになるとそもそも「壊さないで」と言っている意味がなくなり、もっと深刻な問題になる。まちには一定の居住機能が必要で、この点からの市場への公共介入は必要である。

◇中身の問題

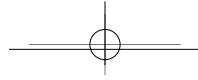
オリンピックも観光戦略も京都で起きていることとはなんの関係もない。問題は、「何千万人来た」とか、数の法則で物事が決まっていることである。たとえば、お正月に門松を飾るところがほとんどない。そういうのがあると「中身を伴った深みのあるまち」と見る人々は感じる。どこにもあるような生活文化であれば、どこでもいい話になってしまう。京都に来てもらった人に深いところまで親しんでもらうためには、中身の密度を高めていかなければならない。

何が本質的なことなのか、見極めることが必要。京都がまちでなくなることは大変、という意識をみんなで持ちましょう。

＜文責：丹羽結花（京町家再生研究会）＞



町家が壊され、ホテル建設現場となっていました。



スペースデザインカレッジ

「町家改修案コンペ展」 開催報告&投票結果発表

スペースデザインカレッジ東京校・京都校、全日コース2年生による町家改修案コンペ展を5月8日～13日に開催いたしました。この取り組みは、京町家再生研究会の小島様のご協力のお陰で14年目となりました。今回の舞台は西陣地区にある総綱業を営なわれていた町家。住まいとしての空間に限定せず、利益を生み出す仕組みを提案することが求められました。この町家を保存・再生すること、地域との関わり方を考慮した提案、各グループ思い思いの「使い方」を表現しました。4月20日には関係者の皆さんにプレゼンテーションを行い、講評していただきました。会期中は、多くの方にお越しいただき、100票を超える数の投票をいただきましたことを心より御礼申し上げます。この場をお借りして結果報告をいたします。



第1位 ORiNUS

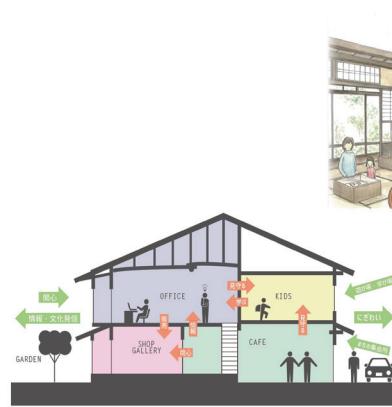


Cグループ 岩橋貴郁 / 小迫真子 / 瀬古英莉奈 / 皆川陽祐(京都校)

ひとと文化が交差する 西陣の地に新しい糸を“織り成す”

私たちは、今回の町家リノベーションにおいて、ギャラリーカフェ×学童保育×オフィスの3つの施設が集まつた「ORiNUS」という複合施設を提案しました。

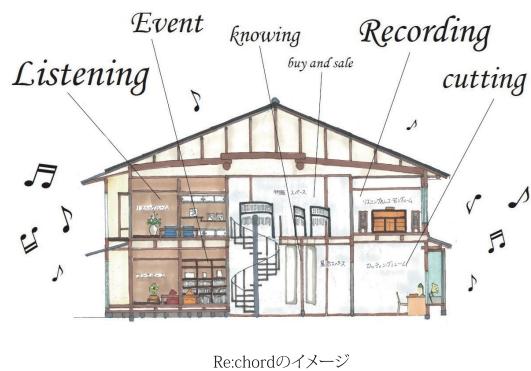
「コミュニケーションやにぎわいを生み出す街の発信拠点であり、人や情報が自然に集まる地域のシンボルやランドマークになる場所」ということが、「ORiNUS」のコンセプトです。



第2位 Re:chord

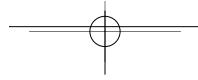


Bグループ 石井優子 / 鎌内翔 / 古地由莉香 / 三田歩(京都校)



大切な想いを未来へと受け継ぐ語り部として、未来へ再生する町家。レコードと音楽を通して、地域の音楽イベントやアート、歴史、そして町家そのものを楽しむための施設を提案しました。

今も尚、残り続ける理由がある。



第2位 せ座 Eグループ 岡本まゆ / 加山穂波 / 久米優里香 / 中村美月 / 長谷川真大(京都校)

町家で映画を愉しむ

地域の歴史的特色や町家の魅力を活かした、様々なひとを呼び込んで利用してもらえる施設。西陣の地は、日本映画発祥の地として映画と歴史的な繋がりがあります。再びこの土地で映画や舞台などの芸術を発信する場を作りたいと思い、提案しました。



松の間



竹の間

Aグループ／原将貴 上條亮太 井坂仁美 奈須美幸(東京校)

若手料理人を育てるシェアハウス 「COOK HOUSE」



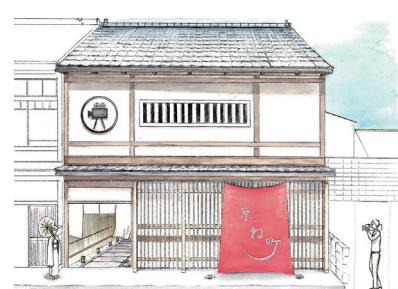
一階には別の企業が運営するおばんざい屋さんを併設。
おばんざい屋さんの協力のもと、同じ夢を抱えた者同士が共に生活することによって、互いに刺激しあいながら更なる成長を目指せるメリットがあります。
おばんざい屋さんを介して、地域の方々や子供たちとの交流が生まれ、時の流れと共に地域に愛されていく、そんな新しいシェアハウスを提案します。



Fグループ／菅原晴歌 宮毛秀和 岡本佳子
堀尾綺萌 丸山義貴(東京校)

京都は日本のハリウッド。スタジオ「京ね町」

京都の西陣地区が撮影現場で使われている事を知り、そんな素敵な街並みが残る西陣地区をより多くの人に知ってほしいという思いから、ショートムービー・写真スタジオを計画しました。暖簾、路地、古色、前裁、光、影、風、畠の香り…切り取られた風景と共に、ここにしかない一瞬を一生の宝物として残してもらいたいです。



Dグループ／高橋涼太郎 田中杏樹 高橋沙和
齊藤美沙 田中さくら(東京校)

訪れる人と京都を繋ぐ、京町家を後世に残していくギャラリー糸織-しおり-

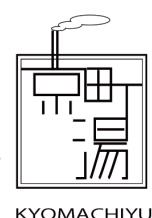
京都に根ざした京町家と西陣織。施主の故郷であるメキシコの建築家ルイスバラガン。無関係に思える二つの要素に共通点を見出し、京都の町家の特徴を活かした空間。インスタレーションなど、空間を活かしたアートを絡めることで、建物の魅力がより感じられ、京町家の可能性が広がることを願いました。



Gグループ／飯島ゆうあ 畠山寧央 田村俊祐 新田悠菜(東京校)

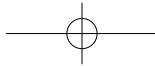
町家銭湯「京町湯」

町家銭湯による地域交流の活性化とお風呂文化の再構築を提案します。京都では国内問わず海外からの観光客も増えているなか、上京区には銭湯が少なく、またお風呂の少ないゲストハウスが多い事に着目しました。誰でも気楽にゆっくりくつろげる空間とどこか懐かしい雰囲気の京町湯を皆さんに提供いたします。



ご協力いただきました皆さんに心より御礼申し上げます。

スペースデザインカレッジ



改修事例 ● 路地奥の長屋を引き継ぐ

中京区 Nk邸

設計：中村設計／施工：大下工務店

2017年3月にご相談、調査に伺ったN k邸は路地奥の5軒長屋の南端にあり、ご主人のご実家で、数年前までお祖母様が住んでおられた。友禅の伝統工芸士の家系で、現在は大阪にある展覧会図録等の製作会社に勤務されている。夫婦お二人で大阪からこちらへ転居の計画をされていた。

1列二室型の典型的な路地長屋の町家は若干の改修はされていたものの、概ね当初の姿を維持されていて、内部についても、N k氏のご家族が日頃から手入れされていたので、とても綺麗な状態であった。とは言え、屋根や構造、設備機器類等のハード面については改修の時期がきていた。

お住まいなので、大げさな間取り変更や機能は無いものの、塞がれて二階の床となっていた火袋の復旧、水廻り機器の更新やその他、壁、建具等の張り替え塗り替え、N k氏のご希望もあり、元の町家の姿を取り戻しつつ、屋根、構造、設備、外壁を改修する町家改修としては理想的な内容になった。

2月に工事がはじまり構造改修に掛かると例によってハシリの土間コンクリート下から、井戸を発見、さらに井戸の脇には30cm四方程度の空洞ができていて、それが原因で大黒柱が80mm程度下がっていた。空洞の原因は井戸よりも恐らく古い給水管の漏水により周囲の土を剥ぎとつていったと考えられるが、とは言え、井戸をそのままにしておく訳にもいかず、穴

埋めをした。井戸引きとその上の側柱は案の定、不朽、蟻害ですべて根継を行った。

現状雨漏りはないものの、屋根は建築当初から葺き替えをされた形跡もなく、大分痛んでいたため、全面葺き替えをした。

意匠については前述の通りN k氏のご希望もあってシンプルイズベスト。セレクトされてきたキッチンや衛生陶器などは町家の空間にも合い逆に私自身も参考にさせて頂いた。古建具や出格子のベンガラ塗ではご夫婦で私と一緒に手伝い頂き、白木で購入しベンガラで着色され油拭きをした舞良戸にはよろこんで頂いた。外されて2階の木置の窓に移動していた格子を元の出格子に戻して表構を当初の姿に戻した。

今回のN k邸の改修では典型的な1列二室の町家を屋根、構造、外壁、設備と建物の維持健全化に必要なすべての改修ができ、内装や設備に至っても元の姿に戻したり、配管配線類を出来る限り露出にして、メンテナンスや後の改修がしやすいように施工した。

町家にとって理想的な改修を実行され、ご実家に戻されてお住まいになる。その一助になれた事と町家の良さをたくさん引き立てて頂いたN k氏に感謝したいと思います。

＜井澤弘隆（京町家作事組）＞



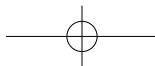
ファサード

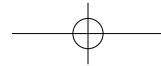


復元した火袋



ミセの間





町家再生再訪 その14 ○ 錦市場 陶工房 器土合燐 (設計:アトリエRYO 施工:アラキ工務店)

錦市場 陶工房「器土合燐」のご主人山本康雄さんにお話し伺いました。

山本さんは10年前に蕎麦屋「山茂登」を閉店し、陶工房とギャラリーをオープンして、パート・ド・ヴェールやステンドグラス、書画やお花の展示、又落語会や長唄教室などを開き、土蔵のある町家のなかで京文化を守り育ててこられました。このごろは焼きものに加え、お酒の販売を始め、ギャラリーはお休みされています。

○錦市場周辺の商いと住環境の移り変わり

初代山本市蔵が江戸時代の末頃に「山市」という仕出し屋を始め、御所に出入りした記録も残っています。京都の町は海が遠いので、昔から保存食が発達していて、佃煮や干物類や漬物などが豊富にあります。良い時代には、仕出しがよく利用され、山市から分家が三つでき、本家も繁盛していました。あるときには、住友家の庭で園遊会があり 2000 個のお弁当の注文があったり、奥の座敷には、竹内栖鳳や今尾景年ら文化人の方々が集まっていたそうです。

父は戦地から帰還後、塩干物の店を始めました。昭和の初めに中央市場が出来た頃には錦市場は、卸売りと小売りが共存し、若狭湾から山陰線で蒸気機関車に積まれてきた干物等を仕入れて売っていましたが、やがて流通が変わって卸売りはなくなり、近くにスーパーもできました。昭和40~50年代になると結婚式場が次から次にでき、仕出しの店は減って、ホテルが冠婚葬祭の場に変わりました。しかし京都には多くの日本文化が根付いているので、いまでも仕出し文化はしっかりと残っています。

私は戦後生まれの次男坊で、この家の一部で蕎麦屋をしていましたが、兄夫婦が早く亡くなり、父母の介護をしながら蕎麦屋を続けていました。息子が陶芸をするようになり、10年前に蕎麦屋をやめ、陶工房とギャラリーを始めました。本家の塩干物の店は甥が引き継いでいます。

私はこの家を継ぐとは思っていません、中京区に初めて建ったマンションに入りましたが、それからどんどんマンションができ、町家は飲食店に変わり、外国人観光客が多くなり、プチホテルの乱立、そして民泊ブームになり、商いと居住環境も大きく変わっていました。土地の値段が高くなり、敷地全体を有効利用しようと考えるようになって、路地をつくって奥への動線を確保し、表を貸すようになった家も何軒かあります。元々の住人が錦を捨てて賃貸し、商売も変わっていました。300円~500円の食べ歩きのものが多くなっています。ゴミの散乱防止、防犯など、錦市場の振興組合などいくつかの団体で食べ歩きの出店を抑える方法を考えたりしています。禁煙や呼び込み禁止などのルールは、すでに出来ています。しかしこのような移り変わりによって、錦市場が、家の中に何の文化も無くなってしまい、表通りの見た目だけを重視した、空洞化した映画村になってしまうのではないかと心配しています。

表の商いは、次男坊の私は 50 年、100 年先の業種はあまりこだわりません。10 年くらいのスパンで考え、変えていくものです。しかし内は守ってきました。さまざまな年中行事、元旦の飾りをして、家を守り、家を継ぐ、その心意気でやってきました。商売替えはするけれども、家を継いで行く。これからもそうしていきたいですね。

○京都人気質

京都に最初にできた百貨店が大丸で、四条高倉の角に小さくあったのが、だんだん拡張され、いまは東洞院と錦小路にも面しています。庶民的なところもあって「大丸さん」と呼ばれ親しまれています。高島屋はそれよりちょっと高級クラスという感じです。藤井大丸も上手に個性を出して食品売り場も充実しています。阪急百貨店はダメでしたね。もうないでしょう。いま丸井になってますが、京都の人は行かない。老舗を応援したいという気持ちがあるんでしょう。京都で老舗と言うと 100 年や 200 年ではないんですけどね。

このあいだ議員さんから手紙が届きました。四条通を歩いて、京都の文化が大変なことになっている、住人の暮らしはどうなっているのかと書かれています。京都文化が外人向けと日本人向けとごちゃまぜになってきているんです。

京都には、外からの文化がいっぱい入ってきます。シルクロードの終点なんです。京都人は新しもの好きで、京文化と異文化を織り交ぜて融合させ、流行をつくってきました。

最近、出会ったフランス人が、パリは京都と似た現象があるんだと言って、家内と意気投合しましてね。ルーブル美術館のモナ・リザの前で中国人が人だかりをつくっていても警備員が注意しない。フランスは第 2 次大戦でパリを占領され、米英に助けられ解放された歴史があって、外国人を拒否できなくなっている。観光立国でもあり、外国に対して強く出られなくなつたと。それでも内に守りたい文化があります。私も台湾人の美術商が訪ねてきたとき、蔵に残っている器などの道具類を肴に色々な話をして、心が通じる気持ちがしました。

○これからの暮らし

先月、長男に孫が生まれて、じいばかになっています。いずれはここに長男家族が住んで、孫を見ながら暮らすのを楽しみにしています。娘には小学校 5 年生の双子の男の子がいて、しょっちゅう友達が遊びに来てにぎやかに暮らしているので、そんなふうになつたらいいなと思っています。幸い建物は梅普請のしっかりした町家なので、これからここで家族が暮らせるように、アラキ工務店に網戸をお願いしたり、修復してもらおうと思っています。私はこの家で祖母や叔母や兄弟と一緒に大家族のなかで育って、自分の部屋がなくて、小机を隅っこに持つて行って勉強していました。家に友達を呼べないのが悲しかったので、孫が友達と遊べるような家にしたいと思っています。

<取材・構成:京町家作事組事務局 森珠恵>

こちらもあわせてお読み下さい。

Vol.55 2007 年 11 月 1 日号 京町家再生の試み

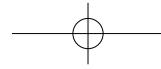
「お蕎麦屋さんからギャラリー+陶工房へ」

—ギャラリー「昌の蔵」、陶工房「器土合燐(きどあいらく)」内田康博

<http://kyomachiya.net/saisei/saisei/33.html>

Vol.56 2008 年 1 月 1 日号 改修事例「町家を二つに分け、新規事業をおこす」木下龍一

<http://kyomachiya.net/sakuji/kaisyu/30.html>



interview ——京町家に移り住んで◎ 薬屋さんだった京町家にお住まいのF様御夫婦

今回は大宮姉小路に古くからあり、以前お薬屋さんをされておりました由緒ある京町家。100年以上の建物。大黒柱を修繕する際に、棟上げされた時の記録があり、建築された時のこと書かれていたそうです。ご主人は8代目となり家督を継がれてまいりました。今回は奥様がお嫁に来られた時の感想・様子から、現在に至るお住まいについてお伺いしてまいりました。(聞き手:若山不動産 若山正治)

●こちらの建物で生活し始めた時の印象は(奥様)

以前住んでいた家も町家として似たような感じの家だったので、特にその当時、違和感はありませんでした。土間があつて、離れがあつて、裏庭があつてという環境。親との同居ということに関しても今少ないかもしれません、自然な形で3世代で生活をしておりました。子供を妊娠した時に、土間から上がる際、敷居が高いことは大変だと感じました。こちらの家はガスでしたので、今では当たり前ですが、便利だと感じたのを覚えています。「日本家屋の良さ、そして庭があり広く感じ気持ちがいい」と今でも感じています。

●建物の良さを教えてください。

ご主人:一番は木のぬくもりのあることです。そして和風の建物そのものが心を落ち着けます。庭があつて、朝水やりでたり、建物の中のしつらえを変えたりして、季節に応じて毎日の生活を楽しめることは、小さい頃は当たり前と思っておりましたが、とても贅沢なことだと思っております。

奥様:生活スタイルの変化により建物を修繕していくことができることだと思います。バリアフリーにすることにより生活も楽になりました。不便な中でも工夫できるところですね。

●2002年の大幅な改修について

父が亡くなった後、建物の大幅な改修を行いました。薬屋をしておりました様態を変えて住居のみのスタイルに変わったこともあり、大工さんに大幅に見てもらい改修を行いました。さすがに耐震のこともあり梁を替え、シロアリの対策も行いました。お風呂、台所などの水回りも改修しました。おくどさん、井戸もありましたが、生活しやすい形へ改修いたしました。

●地域とのつながりについて

この町内は横の連携がよく仲良くさせてもらっています。お千度、地蔵盆、体育祭、そして今は敬老会・防災訓練など子供は少ないながらも色々と活動しています。※お千度:この

地域では八坂神社に5月に町内でお参りに行くこと。

●近隣の様子をみて

保守的な街ではありますが、ドーナツ化現象をうけて住民は少なく、老人所帯も増えています。色々活用してほしいと思っていますが、若い人が住み続けるのは難しいという一面も理解しています。町家を活かしてお店などは増えていますが、住むところとしてはマンションを見ながら難しいのかと少し感じています。

●これからについて

不便なところで生活している中での工夫をすることが当たり前の日常。町家に住み続けることが日常と思われて日々感謝して生活しています。必要とするライフスタイルを考えて、建物を形式はどうであろうとできるだけ残していきたい。そして自分たちも残っていきたいです。

今は息子とも一緒に住んでいて、色々これからのことを考えております。息子の友人等からすると、この家は広すぎてビックリされることも多いと聞いています。自分が築いてきたものもありますが、縛られない、良い生き方をしてほしいと思っております。

通る人が建物を見上げてくれて、看板の跡を見てほっとしてくれる様子。建物中をガラス戸で覗き込めて、母が近くの住民のみなさんと楽しくいた空間。残していくべきはいいと思っております。



●事務局覚え書き

3回目の開催となる「3月8日は町家の日」。次回は2019年3月2日(土)~10日(日)を町家WEEKとして様々な町家で様々なイベントを企画しております。京町家にお住まいでのこの「3月8日は町家の日」で一緒にイベントを行い、盛り上げていただける方も募集しております。【11月末締切予定】ご興味のある方はご連絡ください。

<京町家情報センター 城幸央>

オーナー登録数: 延232

ユーザー登録数: 延1734

物件登録数: 延1812

成約件数: 延220 (2018年8月5日現在)

